

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小泉 佑介

今日のインドネシアやマレーシアなどの領域からなる東南アジア島嶼部では、19世紀後半以降現在に至るまで、世界市場向けの商品作物生産の興隆を契機とした人口希薄な地域への大量の移住と開拓を通じて、社会の空間的拡大が続いてきた。東南アジア社会経済論では、こうした形で新たに形成されてきた社会経済空間を、自給的作物の生産を基盤とする人口稠密な伝統的社会とは異なる特徴を持つフロンティア空間としてとらえ、その性格や東南アジアの社会経済変容における意義を論じてきた。スマトラやカリマンタンなど人口希薄な巨大な島々からなるインドネシア外島地域では、国際的な油脂需要の増大を背景に、1970年代末から現在に至る約40年間に、食品や洗剤などに用いられるパーム油の原料となるアブラヤシ生産が爆発的に拡大し、それと連動する形で、熱帯林の消失に象徴される生態環境の大幅な改変や、移住と開拓を通じた新たなフロンティア空間の形成が進んだ。本研究は、インドネシアにおけるアブラヤシ生産拡大の焦点の1つとなってきたスマトラ中部リアウ州におけるフロンティア空間の形成と成熟を、とくに隣接する北スマトラ州やジャワからの移住者によるアブラヤシ生産への参入とその変化に注目しながら、社会経済地理学的立場から多面的に明らかにしようとしたものである。

本研究は7章からなる。第1章では、東南アジアを対象としたフロンティア空間論の系譜を検討し、先行研究が、人々の移住や開拓、資源利用の外延的な拡大の様相を記述するだけでなく、フロンティア空間におけるダイナミックな社会層変動に注目していることを指摘し、本研究においても、インドネシア外島地域におけるアブラヤシ生産の拡大が、フロンティア空間の形成と成熟の過程を通じて、いかなる社会層変動を生み出してきたかに分析の焦点を当てることが示される。第2章では、全国集計に基づくインドネシアのアブラヤシ生産の拡大過程のマクロ的な考察が行われ、1990年代後半を境に、従来の国営の企業農園、中央政府の計画的移住政策による個人農園主導の拡大から、民間の企業農園、自発的な移住・開拓による個人農園主導の拡大に転換したことが明らかにされる。続く第3章では、インドネシア全土を対象にアブラヤシ生産の地理的拡大過程が検討され、1980年代～1990年代にはまずスマトラの諸州で生産の拡大が先行し、2000年代に入ってカリマンタンやスラウェシが後を追うという構図が示され、企業農園・個人農園双方によるアブラヤシ生産拡大の先進地域としてのリアウ州の位置づけが確認される。本章の作業は、先行研究では十分に行われてこなかった、州単位でのアブラヤシ生産の動向を相互に位置づけるための基礎作業として高く評価することができる。

第4章では、リアウ州を対象とした事例研究の導入として、リアウ州の地誌的・歴史的背景を概観した上で、2000年、2010年人口センサス個票データの分析を中心に、リアウ州住民の出生地・民族背景と産業別就業構造を検討し、同州におけるアブラヤシ生産を含む農園作物生産部門の比重の高さとそこへの北スマトラ州やジャワからの移住者の関与の大きさ、またそうした傾向の州内の地理的変異を明らかにした。本章の分析は、近年電子的な利用が可能になってきたインドネシアの人口センサス個票データを地理情報システムに取り込み、個別の研究目的のために活用した先駆的な例としても重要である。

第 5 章と第 6 章では、住民の大部分が北スマトラ州からの移住者とその家族により構成され、1980 年代以降、アブラヤシ生産を目的とした企業農園や個人農園の拡大により開拓が進んだ、まさにフロンティア空間と呼びうるリアウ州の 2 つの地区における、個人・世帯レベルでの移住前と移住後現在に至る就業構造とアブラヤシ生産の変化に焦点を当てた体系的なサンプル調査の結果が分析される。第 5 章では、1980 年代後半、民間の企業農園の開設を起点に、自発的な移住者の流入と開拓が進んだリアウ州中部シアク県カンディス郡の LB 村の 160 名の世帯主に対する調査結果が、第 6 章では、1980 年代半ばの国営企業による企業農園と個人農園の一体的開発を起点に、自発的な移住者の流入と開拓が州内では最も早い段階で進んだリアウ州北部旧バガン・シネンバ郡 BSK 町の 56 名の世帯主に対する調査結果が検討される。ここでの分析から、企業・政府職員から農園労働者に至るまで様々な社会層の人々が、所得の中から土地取得資金を確保してアブラヤシ生産に参入し、さらに土地を担保に資金を借り入れ規模拡大することが可能になってきたこと、しかしこうした動きは地価上昇と土地資源の枯渇によって困難になっていったことなどが明らかにされた。第 7 章では、本研究全体で得られた知見を要約するとともに、生産適期を過ぎた古木の植え替え資金の確保など、今後インドネシアのアブラヤシ個人農園が直面するであろう課題について、展望が述べられている。

以上のように本研究は、過去約 40 年間のインドネシア外島地域におけるアブラヤシ生産の急激な拡大とインドネシアの社会経済変容との関係に関して、大量の移住者を受け入れアブラヤシ生産拡大の frontline となってきた地域が、移住者にとって個人農園経営への参入をテコに社会経済的上昇を可能にするフロンティア空間として機能してきたことを、綿密なフィールドワークに基づき実証的に解明したものであり、東南アジア社会経済論に対する新たな貢献が認められる。さらに、センサス等の個票レベルのデータを独自に集計して現象の時空間動態を解明し、その中に調査対象地域を位置づけるなど、社会経済地理学の最新の手法を駆使して現象にアプローチした点でも斬新な研究といえる。よって本審査委員会は本研究が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。